

平成 28 年度 第 2 回徳島県総合教育会議 議事録

日時：平成 28 年 10 月 7 日（金）8:45 ～ 10:30

場所：農林水産総合技術支援センター

1 開会

（司会進行）

＜七條部長＞

それではただいまから、平成28年度第2回目の総合教育会議を開催させていただきます。本日は、委員の皆様全員にご出席いただいております。ありがとうございます。それから、出席の皆様方につきましては、お手元の名簿と配席表でご紹介とさせていただきますので、どうぞよろしくお願いたします。まず始めに、飯泉知事よりご挨拶をいただきます。

（あいさつ）

＜飯泉知事＞

まずは皆様方、今日は早朝から本当にありがとうございます。平成28年度第2回総合教育会議であります。今日は、「キャリア教育」をテーマに掲げさせていただきます。教育大綱の中に、このキャリア教育を人材育成の大きな柱の一つに掲げているところであります。もちろんキャリア教育をしていくに当たっては、科学技術、これをしっかりと身に付けていこう、活用しよう。何と言っても3年連続で日本人がノーベル賞を取る時代になったところでありますので、これを未来の日本、徳島を担っていただく若い皆様方に、やはり発育段階に応じて理解を、そして身に付けていただこうと。例えば、小学校・中学校の中で、あるいは中学校・高校の段階でということで、様々な科学技術を活用した講座。例えば小学校であれば出前講座。また、中学校・高校であれば科学技術アカデミーという形で展開をさせていただきます。そういう意味で、農林水産全般としての、また今、六次産業化と言われているところでありますが、その技術の粋が集まったのが農林水産総合技術支援センターということで、この中には当然、農業の様々な技術、あるいは教育機関として、今では専修学校となっている農業大学校、こちらもその中にあるところであります。今、それぞれ先生方にはご覧いただいたところであります。是非、皆様方にはこのキャリア教育の今後のあり方について、大所高所から様々なご提案をいただければと、この様に考えておりますので、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

（司会進行）

＜七條部長＞

ありがとうございました。それでは、議事に入ります。議事につきましては、飯泉知事に進行をお願いしたいと思います。なお、ご発言の際には、本日はハンドマイクをご用意しておりますので、それをお使いいただければと思いますので、よろしくお願いたします。それでは、飯泉知事よろしく

お願いします。

2 議事 「キャリア教育」について

(進行)

<飯泉知事>

はい、それでは早速議事に移らさせていただきたいと存じます。それでは今も申しあげましたように、今日のテーマは「キャリア教育」ということでもあります。まず一番目として、教育委員会における取組みについて事務局の方から説明をお願いいたします。

(1) 教育委員会の取組みについて

(事務局説明)

<後藤課長>

それでは、教育委員会が取り組んでおりますキャリア教育について、説明させていただきます。

はじめに、本県キャリア教育を推進する上での目指す方向性です。昨今、産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化が進む中で、若者の職業人としての基本的能力の低下や精神的・社会的な自立の遅れが指摘されています。このような状況を鑑み、子供たちの社会的・職業的自立に向けて必要とされる能力・態度を育成すること、そして、ふるさと徳島に誇りを持ち、社会で活躍できる人財を育成することを掲げ、徳島ならではの特色ある施策を展開しています。

これまでの取組みの中で、まず体制づくりの推進をお示ししております。平成25年9月に、学校関係者・経済団体・有識者等で組織する「徳島県キャリア教育推進協議会」を立ち上げ、現在も継続して本協議会を開催しております。

平成26年3月には、徳島県キャリア教育推進指針を策定し、子供たち一人ひとりの社会的・職業的自立に向けて必要とされる資質・能力として、「かかわる力」「みつめる力」「すすむ力」「えがく力」の4つの力を設定するとともに、就学前から高校まで発達段階に応じてその能力を育成するための推進方策についても示しております。また、平成27年度からは、県内すべての公立学校で、全体計画を作成し、系統的・体系的に進めております。

学校におけるキャリア教育を効果的に進めるためには子供たちに社会とのつながりを実感させることが重要であり、その一翼を担うのが、職場体験・インターンシップでございます。これらの受入先企業情報を一元化したデータベースシステムを同じく平成26年3月に構築し総合教育センターのホームページ上で運用をしております。現在、約130社の企業に登録をいただくとともに、現時点での閲覧数も7,000名を越えております。

続いて、高校生に対しまして、スマートフォンのラインを活用して、就職・進学に役立つ旬の情報発信を平成25年7月より行っております。これまでに大学や企業関係者から174件の情報を提供いただき発信するとともに、登録者数も現時点で3,738名と年々増加しております。また、平成28年3月には、職場体験・インターンシップを円滑に進めるための手引を学校編・企業編に分けて作成し、今年度4月から学校や経済団体・企業に順次配布しており、学校・企業間で目標を共有しながら進めていただくよう今後も普及・啓発を図って参りたいと思っております。

続きまして、これまでの取組みの中で、多様な主体との連携をお示ししています。平成25年度より、経済団体・企業と連携し、子供たちに働くことの意義や喜び等を意識させ、地域への夢を育むことを目的といたしまして、講演・出前授業を行っております。これまでに県内公立学校108校で

実施するとともに、平成27年度には、高校5校で、知事による「キャリア教育講座」が開催され、高校生が地方創生を実感することにつながっております。また、平成28年1月には、「企業が求める人材像」について、教員の理解を促すため、徳島銀行代表取締役会長 柿内慎市様を講師にお迎えし、初めてキャリア教育推進フォーラムも開催いたしました。

下段をご覧ください。平成26年度から高校教員を対象に、平成27年度から高校生を対象に、県内企業の魅力やその活動について理解を図り、高校生の県内定着に向けてアシストする取組みとして、県内企業見学バスツアーを開催しております。また、今年度からは新たに小学生・保護者に対象を広げまして、去る8月23日に実施いたしました。小学生・保護者からは、地元このような企業があることを知らなかったなどという感想も聞かれ、今後とも啓発に一層、力を入れて参ります。

平成27年度から進めておりますキャリア教育の新たな展開としての取組みについて説明いたします。地方創生本格展開に当たり、一歩先の未来を見据えて、学校教育においても将来の起業・創業など新たな価値を生み出すことができる創造性、チャレンジ精神といった起業家マインドや地域の農林水産資源を活用し、新たな産業を創出することができる六次産業化人材の育成に取り組んでおります。

上段をご覧ください。今年度、鳴門市撫養小学校、鳴門市第一中学校、鳴門渦潮高校3校を起業家教育実践校に指定し、小中高校生起業塾を開催しております。地元企業や商工会議所と連携し、各学校で児童生徒が企画・開発した商品を11月19日に3校が連携して商店街の空き店舗で、出店・販売する予定にしております。現在は、地域資源を活用した商品開発などに取り組んでおり、今後は、地域活性化に向けてのローカルモデルとして他のエリアにも広げていきたいと考えております。それでは、大道商店街で出店し、元気に声を張り上げて販売に取り組む撫養小学生の様子をご覧ください。

(動画放映)

続いて、右側の高校生によるマーケティング活動についてでございます。専門高校では、大学・企業等と連携し、ものづくりや商品の企画・開発を行っております。その成果を発信する機会として、企業と連携して構築したネットショップサイトでの販売や国内外市場での販売に向けて、現在準備を進めているところでございます。今年度は国内の市場として、11月に徳島そごう催事場での販売、海外市場として来年2月に台湾そごうでの販売を予定しております。

下段をご覧ください。今年度、徳島大学に全国初となる六次産業化人材を育成する生物資源産業学部が新設されましたが、県内の専門高校・総合学科からは地域枠で5名の生徒が合格しております。こうした新たなキャリアパスを中学生とその保護者に発信する取組みとして、昨年度、専門高校説明会を県央・県南・県西で開催し、合わせて256名に参加いただきました。今年度も引き続き開催し、しっかりと情報発信をして参りたいと考えております。

続きまして、現在県央・県南・県西部の農業・工業・商業科設置高校が連携し、生産・加工・販売を一体的に行う六次産業化商品の開発を通して、地域の活性化を担う即戦力となる人材を育成する「6次産業化プロデュース事業」に取り組んでおります。写真にも示しておりますが、本会場には昨年度、城西高校・徳島科学技術高校・徳島商業高校の生徒が、阿波藍をテーマに協働で開発した行燈をはじめ、開発商品の販売促進用ポスターを展示しておりますので、ご覧ください。今年度、県央部では藍を用いた新たな展開、さらに県南部ではゆこう、県西部ではアロマオイルを用いた商

品の開発に向けての取組みを進めているところでございます。

そして、平成29年度にはこれらの実証成果をもとに、県内の高校で初めて農業・工業・商業の各分野を総合的に学ぶことができるアグリビジネス科を城西高校に新設することとしており、本県における農業振興に向けて、注目や期待が高まっているところでございます。今後とも農林水産総合技術支援センターをはじめとする関係機関との連携を深め、一層の取組みを進めて参りたいと思っております。

以上が、教育委員会からの説明でございます。よろしくお願いたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは続きまして、議事の2「農林水産業におけるキャリア教育の取組み」について、事務局から説明をさせていただきます。ちなみにこの2つの説明が終わりましてから、皆様方からのご質問等を受けたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

(2)「農林水産業におけるキャリア教育の取組み」について

(事務局説明)

<貞野課長>

農林水産総合技術支援センター経営推進課長の貞野でございます。

私からは「農林水産業におけるキャリア教育の取組み」についてご説明させていただきます。

ご説明申し上げる内容について、一つ目は「農林水産業におけるキャリア教育の意義」、二つ目が「農業における取組み」、三つ目が「畜産業・林業・水産業における取組み」、最後に「成長産業化を支える人材育成」についてであります。

まず、「農林水産業におけるキャリア教育の意義」としましては、本県農林水産業を基幹産業として持続的に発展させるための担い手の育成・確保がでございます。また、目指す将来像としましては、徳島県の農林水産基本計画にも明記しておりますが、キャリアアップシステムの整備等により、本県農林水産業の次代を担う多様な担い手が、意欲と経営マインドを持って魅力的で付加価値の高い農林水産業を営んでいる姿を描いております。

次に、農業における取組みについてご説明いたします。まず、キャリアアップシステムの整備としましては、教育委員会とも連携しながら、高校から農業大学校、大学、そしてアグリビジネススクールといった教育機会の整備によりまして、キャリアパスの構築による人材育成に取り組んでおります。高校では、吉野川高校、つるぎ高校、さらに城西高校、阿南工業高校、新野高校など「専門高校の強化」に取り組んでいただいております。また、大学では本年4月、徳島大学に全国初の六次産業化人材を育成する「生物資源産業学部」が開設されております。このような中、農業人材の育成を図る農業大学校では、平成23年度に専修学校化を図り、4年生大学への編入が可能となっております。これまでに27年度1名、28年度2名がそれぞれ4年生大学へ編入しております。29年度には、徳島大学生物資源産業学部の2年次への編入に1名が合格しております。こうしたキャリアを経て、農業経営を開始したり、農業法人や食品企業等へ就業し、現場実践を積み重ねていくこととなります。平成25年度には、農業者を含む社会人を対象にしました、経営能力に優れた人材を育成するための「アグリビジネススクール」を開講しまして、農業経営のスキル向上に必要な講座を設けております。現場実践を積み重ねている農業者の皆さんが、更に学びたいと思ったときに、学ぶことができる場を提供しております。

次に、学校現場と連携した取組みについてご紹介させていただきます。学校現場におけるキャリア教育を実施していく上で生じる、成長段階に応じた多様なニーズを満たせるように、学校現場や教育委員会と連携しながら、様々な取組みを行っております。小・中学校では、農作業体験や調理実習による食農教育を支援するために、学習ができる生産現場のマッチングや現地での体験指導を行っております。写真は藍住町の農家でのニンジン収穫体験の様子でございますが、先日は石井小學校がこのセンター敷地内の圃場でサツマイモ収穫体験を行うなど、センターの開放も行っております。また、高校では、センターで開発しました新品種を活用した六次化商品の開発支援を行っております。委員の皆さんのお手元にもあります、すだちとゆずを掛け合わせた新品種の「阿波すず香」を用いた吉野川高校での商品開発につきましては、先月末にも行われましたので、そのときの様子を少しご覧いただきたいと思ひます。

(V T R放映)

(試食配付)

ただいまお手元にお配りいたしましたのは、吉野川高校の生徒の皆さんが実習で作られたマーマレードでございます。V T Rではまだ青い果実で、机の上にもまだ青い果実を置いておりますが、今、お配りしておりますのは、黄色い果実を使って作った物でございます。苦みが少なく「阿波すず香」の特徴がよく出ていると思ひますので、少し味見をしていただければと思ひます。

(試食)

また、高校では、ほかにも委託事業などで、大学や企業と連携しました食育や六次産業化教育を進めております。写真は、四国大学生生活科学部の皆さんが吉野川高校の生徒を対象にしまして、野菜の料理実習を行っているところです。高校生に食育指導を行うとともに、大学生の皆さんにとっても指導実習の場としてご活用いただいたところでございます。このほか、当センターでは、つるぎ高校の「みまから」を対象としたスーパーオンリーワンハイスクールの取組みに対する栽培指導等の支援でありますとか、城西高校、科学技術高校、徳島商業高校の連携によります藍を利用した六次産業化の取組みに対する、藍の収穫機の作成の技術指導なども行って参りました。

次に、農業大学校につきましては、学生が生産から加工・販売まで取り組む模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」の設立や、先進農家での体験学習など、農業経営力を身につけるために実践学習に取り組んでいるところです。写真は「そらそうじゃ」が行っている「きのべ市」の様子でございます。また、大学では、当センターの職員が、農林水産業に関する講義を行ったり、大学が行う地域ビジネス学習への支援などを行っております。写真は四国大学・短大、イオン、阿南農業支援センターが連携しまして、木頭ゆずを教材としたビジネス学習として、今年8月に東京でPRを行っているところです。また、アグリビジネススクールでは、農業者の経営力を高める「ビジネス科」では、法人化や六次産業化による経営の多角化を目指す農業者を対象とした経営コースを設置しております。それから、農業のグローバル化にも対応できるように、海外研修の支援も行っております。また、就農に必要な技術力を高める「テクノ科」では、一般社会人を対象として農業生産の基礎から実践に至る幅広い技術習得ができるようコースを設定しております。

次に、「畜産業・林業・水産業」における取組みについてであります。畜産業につきましては、

板野高校のインターンシップを受け入れたり、農大生や徳大生の生産・試験現場見学や実習をサポートするなど、実体験を通じて現場の実情を理解していただいております。また、農業大学校においては、人工授精師の免許を取得できるような講座を設けております。林業につきましては、本年4月の那賀高校「森林クリエイト科」創設に対応しまして、「那賀町驚敷」の県有林と森林学習館を利用した林業体験林として、「フォレストキャンパス那賀」を設置いたしております。また、本年4月には、徳島のフィールドを活かして「林業アカデミー」を開講し、現場作業の実践的な技術の習得により即戦力となる人材の育成に取り組んでおります。水産業につきましては、科学技術高校の生徒を対象にしまして、「海女」や「定置網」の体験漁業の実施や、徳島大学や里浦漁協とも連携したワカメ養殖の実証実験での施設の提供でありますとか、技術指導を行っております。また、阿南高専では、センター水産研究課が技術指導などの支援を行いまして、学生が卒業研究として本県水産業の振興に寄与する研究を行っております。更には、実践的な技術を身につけた即戦力人材を育成します「漁業アカデミー」についても開講準備を進めているところでございます。

最後に、これからの取組みといたしまして、成長産業化を支える人材育成についてご説明させていただきます。県をはじめとする産学官の連携により、それぞれの強みを活かして新たなイノベーションを創出し、人材育成や研究開発を行う「サイエンスゾーン」の取組みを進めております。まず、ここセンターと農業大学校跡地の徳島大学の新学部の石井キャンパスを中心としまして構築しております「アグリサイエンスゾーン」につきましては、今年5月に、県、徳島大学、タキイ種苗、それから農大卒業生2名が経営参画しておりますTファーム石井の4者が連携協定を締結しまして、民間活力の導入でICTによる次世代型農業の研究・実証や、フィールド演習を充実させた実践的な人材育成など、農業の成長産業化に向けた取組みを加速化して参りたいと考えております。また、7月に科学技術高校も含めた県、徳島大学、阿南工業高等専門学校で「連携協定」を締結し、県や徳島大学の施設がある鳴門地域と海部地域をエリアとして「マリンサイエンスゾーン」を構築しているところです。ここでは、水産海洋資源や先端技術を活用した研究開発や、生徒・学生の研修受入れなど、地域や水産業を支える人材の育成により、水産業の成長産業化を実現して参りたいと考えております。更に今後は、林業でも「フォレストサイエンスゾーン」の構築を進めることとしており、これらの「サイエンスゾーン」を中核としまして農林水産業の成長産業化を支える人材をしっかりと育成していきたいと考えております。

以上で「農林水産業におけるキャリア教育の取組みについて」の説明を終わらせていただきますが、教育委員の皆さんにおかれましては、本日紹介できませんでしたが「小学生の職場体験」や「ふるさと応援し隊事業」への参画をはじめとしまして、地域における農林水産業のキャリア教育の実践にご協力をいただいております。この場をお借りして、お礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。どうもありがとうございました。

(質疑)

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、ただいまの2つの説明につきまして、ご質問ございましたら、承りたいと思います。いかがでしょうか。それでは、その質問も含めて意見交換に移らせていただきたいと思います。それでは恒例となっておりますので、順々にということで、辻委員さんからお願いをしたいと思います。

<辻委員>

取組みの説明ありがとうございました。ご説明いただいたのは、主に高校、高校・大学が中心の取組みということでよろしいでしょうか。対象となっているのは何校ぐらいでしょうか。

<後藤課長>

キャリア教育としては、全ての高校、小・中・高が対象となっているんですが、特に農林水産業等に関するキャリア教育というと実習等になりますが、やはり専門高校が対象になっているということで、農業関係では、新野高校総合学科を入れても6校ぐらいが対象となっています。工業関係は直接関係ないんですが、農業学科、農業系のコースを設置している高校又は分校が現在は6校、人数的には全体的から見ると大体5%程度になると思います。六次産業化ということで、工業とか商業の学科の生徒にも広がりがあると思います。

<辻委員>

これから、全部の普通科高校にもこういうことをしていかれるのですか。

<後藤課長>

今は、農林水産関係は、専門高校が中心となっているんですけど、普通科におけるキャリア教育、もちろん、就職する生徒に対しては、即社会人になるためのキャリア教育が実施されていますが、大学進学を考えている生徒に対しては、大学を卒業した後、自分の将来の設計を描いて、将来、何になりたくて何を学ぶ為に進学するのか、そういった視点を、自分の将来に向けて、また、社会の状況、社会における様々な産業であるとか、新しい分野に目を向けるような取り組みが各学校で行われていますので、色々なところにインターンシップにも行っている生徒もいますが、農林水産業にインターンシップというと、どうしても専門高校の生徒が中心となると思います。

<辻委員>

ありがとうございました。農林水産総合技術支援センターでは、どうですか。

<小川校長>

農業大学校です。農業大学校は2学年なんですけども、定員40名で最大80名の方に対して、うちの農大生についてはキャリア教育を行っています。それから高校との連携ということで、さきほどお話にありました農業系の6校とは様々な点で連携して活動しております。それから商業高校、例えばで申しますと、11月に行われますヴォルティス学園祭というのがございますけれども、そこには渦潮高校とか、それから徳島商業、それから小松島西高校が来られて、商品を販売したり等やっているんですけども、我々もその場で販売実習をしたりしておりますし、今年は残念ながらスケジュールの関係で行けないんですけども、その代わりということなんですけども、徳島商業高校と一緒に商品開発をするということで、その材料を農大で作って、連携して商業高校で商品のアイデアを出して、製作と販売は私ども農大生行けませんので、商業高校にお願いするというので、連携をしております。それから今回の趣旨とちょっとずれるかもしれませんが、社会人に対しての農業教育ということで、さきほどお話にもありましたアグリビジネススクールで、いわゆる社会人の方の農業者に対しても営農技術力、経営力の養成をしております。それは、年間数百人と思いま

す。

<辻委員>

ありがとうございました。発表を見させていただいて、まず、最初に教育委員会から商業体験を試みようということから始められていると思うんですけど、その最終形がもし起業する方向に向いているのであれば、当然、商品開発とか、それよりもっと大事なものは、マーケティングかなと思います。起業する段においては、やはりどうやって事業化するんだということが必要なのではないかと思います。ただ、起業するというのは、全ての子に向いているとは思いません。ですので、もう一つの選択は、職人になるということ、これもまた非常に大事なことだと思うんですね。世の中の9割は、職人である。そういうのができるようになると食べていけると思いますので、そのあたりのこと、当然、そういうこともやっているとは思いますが、そういう大事さも説いていただきたいなと思います。

あと、この阿波すず香のマーマレード良いですね。色々な物、食用肉の加工なんかは結構皆さん思いついてやられるんですが、是非とも、誰かに味を評価してもらおうと一番良いと思います。自分自身の味と市場の味が多少違うんで、そのあたりの評価も入れられると良いのではないかと思います。

<飯泉知事>

ありがとうございました。今辻委員さんからはやはり、手に職ですよ。昔は「職業科」って言って、今は「専門科」とも言ってますけどね、やっぱりみんなが手に職を、だいたい小中学校で覚えさせるんですよ。だから中学校でもT定規買って、木工道具持って全部やりましたもんね。だからこれからやはり、普通科の高校も六次産業化ということになって、今お話にもありましたマーケティング。マーケティングと物作りを分けちゃうんですよ、この国は。そうじゃなくて一体的で、どちらからアプローチするのか。だからマーケティングから今度はじゃあ現場の物作りを知らにゃいかん。また、物作って、でもそれだけでは起業できない。じゃあ、マーケティングも勉強しよう。どちらから行ってもいいということがありますので、やっぱり今後、教育委員会の皆さん方も、今はよく言われるのが普通科の高校を出て、普通科のいわゆる大学へ行って、就職できないって言うんですね。それでいわゆる専門学校に行って、企業の求める人材になって行くと。だったらもう高校の段階、大学の段階でそういったものを身に付けたらいいじゃないということになりますのでね。我々そうした意味で、平成28年度から「職業科」っていう名前を止めて、六次産業化に向けてのいわゆる「専門科」という形で、資料の方もそうなってますよね。これからはいわゆる普通科っていうのではなくて、そうしたイメージを持っていくと。どっちからアプローチをするかっていう違いだけだという点で、今のは大変貴重なご意見です。また、阿波すず香のマーマレード大変評価をいただきました。鶏肉、鴨肉とはオレンジソースとよく言いますのでね、また是非、阿波尾鶏をはじめとしてチキンの関係でこれのコラボ商品とかレストランのPRを是非、販路開拓をよろしくお願ひしたいと思います。ありがとうございました。それでは、三牧委員さんお願ひいたします。

<三牧委員>

キャリア教育の推進計画はとても良いものができていると思います。ただ、学校現場にいた者と

して、このキャリア教育が現場でどれぐらい実施されているか、それから、子供たちにどの程度浸透し、成果が表れつつあるのか、というのがやはり気になることです。何の場合においても、計画はとても良いものができているのですが、いかんせん、大変忙しい、時間が足りないなどの様々な要因で、実践に移す、あるいは、成果を上げていくというところが非常に難しいものがあります。この場合も、お話を聞きながら、このキャリア教育の評価というものはどのようにしていくのかと思いました。25年度に推進協議会ができ、26年度に指針ができて、そして今年度、28年度ですから、そうそう簡単に成果は出てこないと思うのですが、どういうふうに、どのような場面で、あるいは、どういったことを目指して、1年目、2年目、あるいは5年目、10年目の評価をどうしていくか、それによって、どんなふうにこの計画、あるいは方針を変更し、あるいは広げていくかということ、やはり、しっかりしたものを持っていないといけない気がします。今、子供たち・若い人の、反社会的・非社会的な行動だったり、生活だったりというのを、ニュースでよく目にします。このキャリア教育の中の「かかわる力」、「みつめる力」、「すすむ力」、「えがく力」、こういった力をきっちり育てていくことによって、立派な社会人としての若者に育っていくと思っています。その為にも、今、子供たちがどれぐらい育ってきたのか、変わってきたのか、あるいは変わっていないのか、そういったところを私たちはしっかりと見ていく必要があると思っています。あるいは、子供の中に変化として現れてくるのは教育というのは非常に息の長い営みでありますから、すぐには出てこないかもしれませんが、教育内容や、方法、システムとか、あるいは、県の事業内容・取組み、そういったものがどれだけ良い影響を与えているか、あるいは、それほど影響を与えていないか、そういったことを点検すること。それから、このキャリア教育について言いましたら、例えば、インターンシップの内容ですが、子供たち側のメリットはどういうものがあるか、どういうふうな成果が上がってきているのか、あるいは受入側である企業側はどうだったのか、ただのサービスで子供たちを受け入れているだけなのか、それとも、企業の中で本当にメリットとして何らかの形が出てきているのか、それを、発展していくにはどうすれば良いのか。大きく言えば、このキャリア教育が県全体にどういう良い影響を与えているのか、そういったところを評価していく、そういった目が大切なのではないかと思えます。

さきほど、檜などの国産材のことが少し話題に上りましたが、昨日、テレビを観ておりましたら、日本の檜が韓国で今大変もてはやされているとか。その人が言うには、「日本人は足元に宝があるのに気がつかないんだ」というふうなことをおっしゃっていました。私たちはそういったところが大きいのではないかなと思っています。林業にしても、せっかくの木材があるのに、日本の至るところの伐採権を外国企業に売ってしまう、そういうことはもったいないなと思いました。それを何とかしていこうという県の取組みなんかはここから育ってくれば良いなと思っています。少し話が逸れましたが、教育における様々な事業や取組みの評価について、確かな目を持っていないといけないなと思いました。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。今、三牧委員さんからもお話にあった、キャリア教育の評価ですね。確かに計画を作った、そして今、実践段階と。そろそろ成果が出てくるのではないかなってなると、当然その評価をしなければいけない。どのようにその評価をするのか。もう一つ具体的にインターンシップですね。生徒、企業両方のメリットがどうなのか。もしメリットがあるならそれを伸ばしていくにはどうしたらいいのか。最終的には県全体としてもこれがメリットになってい

く、そうした点ですね。さきほどの若者、反また非社会的な行動、これを物作りをすることによって、キャリア教育をすることによって、こうした行動が自ずと無くなっていくのではないだろうかとお話いただきましたので、もし教育委員会が評価のあり方ですね、あるいはインターンシップの生徒さん側としてのメリットがどんな形があるのか、もしお考えがあるのであれば、いただければと思います。

<後藤課長>

キャリア教育につきましては、県全体の指標としてはインターンシップの実施率等で指標にはしているんですけど、これにつきましては、中学校においては、ほぼ100%、高校におきましても、一部の定時制のところを除きまして、学校数といたしましては、ほぼ100%となっているんですけど、どうしても高校になりますと、ある学年で全員が参加する、しかし期間としては、どうしても2日とか3日とか、短期間になってしまうという傾向にありますけれども、他の教育活動との兼ね合いで、なかなか日にちを伸ばすとか、そういうところには至っていないような状況です。生徒側のメリットと示したように、アンケート調査等を実施しておりまして、やはり、社会で働くということの大変さが分かったとか、挨拶や礼儀、マナーなどの大切さを学んだとか、そういうふうな評価が出ています。また、企業側にとりましても、なかなか受け入れられている企業さんは、毎年のように受け入れてくださるんですが、最初はどのようにやって受け入れたらいいのか分からないとか、そういうふうなことがあるのですが、手引きなどを見まして、受け入れてみると非常に会社のシステムを見直すきっかけになった、とか、また、企業のPR、地域社会、地元へのPRにもなったとか、そういうふうな評価も得ています。受け入れるのは、一般の業務に加えての業務になりますので、なかなか大変だというようなご意見もいただいております。各学校におきましては、学校評価の一環として、キャリア教育の推進というのを目標に掲げて、どのぐらい実施できているか、そういうふうな評価も行っておりますので、そういう学校評価の結果等も丁寧に拾い上げていきたいと思えます。児童・生徒の個人の評価としては、やはり文部科学省等からも指針が出ているのですが、生徒の態度の変容というか、非常に数値にはしにくいのですが、前向きに自分の進路について考えるようになったかどうか、他人と積極的に関わられるようになったかどうか、そういうところを担当の先生方を中心に、丁寧に評価していただけたら、それをまた拾い上げて、今後の指針とか計画の変更、改善につなげて参りたいと考えています。以上です。

<美馬教育長>

私も昨年専門高校でお世話になっておりましたので、先ほど数値での評価が難しいとの話がありましたが、子供がどう変容するかは、非常に分かりやすいと思えます。インターンシップから帰ってきた後の行動を見ておきますと、言葉遣い一つとっても、変容が一目瞭然に分かる。それも、インターンシップを1日2日行くとかいうのではなくて、企業さんには非常に負担をかけているのですが、ある期間長く行っている、そのことによって、かなり本質的なことまで教えていただいたりして、こういうところが良いかなと思えます。例えば、農業大学校さんに実習のお願いをしたり、そういう取組みの成果は、3年生になると課題研究という授業になります。これはいわゆる大学でいう卒論にあたるようなものになります。グループで活動して成果として発表する、そこに必ず活かされます。2年生の時に立てた計画と、3年生になって立てた計画は非常に変わります。そのあたりの評価の伸びを見てみると、かなり見えてくるかなと思えます。

<飯泉知事>

ありがとうございました。三牧委員さんどうぞ。

<三牧委員>

先日、水戸で全国教育委員の研究会がありまして、その時の資料で、青森県でキャリアノートというのを作って、児童生徒が自分のキャリア発達の振り返りをしている。キャリアノートを書きつづっていくことで、自身の成長や変化を自分の中に落とし込んでいく、経験を落とし込んでいく、そういうことが良いなと思いました。それともう一つ、茨城県では中身がよくわからないんですが、「インターンシップ及びデュアルシステムの推進」という取組みがあります。インターンシップよりさらに、より現実の仕事に近い形で経験をしていくシステムではないかと思います。それも面白いなと思います。

それともう1点、今、教育の側から見て話し合いをしていますが、例えば、こういう場で農林水産部の方から、今自分たちの部署ではこうふうなことをしているのだけど、学校教育の中にこんなことを取り入れて欲しいなどと意見交換ができれば、この総合教育会議が有意義になると思います。

<飯泉知事>

ありがとうございました。今日は農林水産部たくさんいますので、どうですか。

<柴折所長>

ありがとうございます。我々、研究・教育をセンターでやっておりますけれども、今、新しい技術としましても様々なことを生み出しております。こういったことに、できるだけたくさんの若い高校生の教育に取り入れていきたいですし、農林水産業に興味を持ってもらうということにつなげていきたいと思っております。また、農大生に高校から来ていただいておりますけれども、さきほども説明しましたが、定員いっぱいにはなっていない状況がございます。これをもっとたくさん農大生を受け入れる為にですね、高校の先生方に相談しておりますけれども、高校から来ていただくという道筋だけでなく、更に中学校・小学校に向けても、高校とそれと農大とが一緒になってですね、アプローチをしていって。もっともっと若い子どもたちの時代から農林水産業に興味を持ってもらって、専門高校そして農業大学校、更にはある学生については大学でと、という風なキャリアパスを作っていくという様なことを教育委員会と一緒にですね、やっていきたいなと思っておりますので、ご協力よろしく願いいたします。

<飯泉知事>

今の話でいくと、逆に中学校の時に農大でいろんな体験を。例えばサマーキャンプで一週間とか。そういうのをほとんどの中学校にやってもらったらいいですよね。そして今度は高校もインターンシップの先として、さきほどの茨城でやってるっていう話がある。そうしたものを農大に来てもらうのも一つ。高校生にね、1年とか2年とか、3年生になったら大変かもしれないね。そしたら逆にそっちの方向へ行こうと。特に普通科の子たちが重要かもしれないですね。自分の適性が何もないから逆に普通科に行ってるという子が非常に多いと思うんですよね。だから結局大学へ行っても無目的。そして社会人になって、やっぱり無目的と。だからそうした点を早い段階で、自分の可能

性というものを、あるいは適性といったものを自ら選べるというものが必要。また先生方もそれを見てますのでね。是非、そういう中学校、それから高校、現役。特に普通科を対象にして、これもまた進めていただければ、恐らく今三牧委員さんが言われたことに合致していくんじゃないかと思えますので、そこは農林水産部と教育委員会とでタッグを組んでやっていただければと思います。それでは次に、今度は田村委員さんお願いいたします。

<田村委員>

今日は施設を見せていただきありがとうございました。県材を使用し、藍の使い方も工夫され、地元の産業を支え、研究する施設としてのメッセージを感じ見学させていただきました。

キャリア教育については、指針もしっかりしたものがありますし、取組みもどんどんされているということで、結果がとても楽しみだと思いました。本日の取組み映像の中で、子供たちが、本物の体験というか、実社会と関わって様々な体験をしている時の笑顔がとても良いです。学びのキーワードは、楽しみとか面白いとか、新たな発見だとか、不思議感だとかが大切なので、そういう学びは自然と笑顔になります。このような体験をどんどんさせて欲しいと思います。そうすると、学ぶことが面白くなり、勉強が楽しくなるとともに社会に出るためにはこういうことを学ばないといけないということが分かってくる。そういう現実と結びつけた教科学習が、生きるための勉強になり、自分の将来と結びつけた学びになると思いました。

私のゼミの卒業生ですが、千葉で2年間教員して今年、林業アカデミーに入って頑張っているのがおります。千葉では色々悩んでいて、相談にもなっていました。山が好きな学生でしたので、徳島に戻ることを勧めながら林業関係で何かないかと探していたら、林業アカデミーというプログラムがあると知り勧めました。ゼミでは、将来教員になる学生達に、自然環境問題を学ばせるという切り口から山に関わり、森林の問題を教えてくださいましたので、その実践的学びをするために山へ入って行きました。植樹から下草刈り、間伐等、山の作業を体験しながら、上勝町の方とも個人的な繋がりもつくり、上勝の千年の森づくりもスタートから関わっています。あと、六丁の森づくりも含め、山について多くの体験をさせていただいたそのことが、その彼をスムーズに林業に導けたのだと思います。今はとても楽しそうです。林業関連で六次産業をされている、岡田育大さんとも関わりを持って多くの刺激をもらっているようです。

彼にとってはゼミでの山の体験が非常に良かったのだと思いますが、高校の進路指導は重要です。四国大学にも教師を希望して入学するが、途中で免許取得を止める学生が以前より増えてきました。自分に合った職業を幅広い分野から選べる時代になっているので、小さい頃からの実体験を通じたキャリア教育が非常に大事になります。子供の将来のためにどんな道がベストかを教師の方が多くの選択肢を持って進路指導すべき時代だと思います。

最後に、アグリビジネススクールですか、私もこれに参加したいなと思い、大学を退職したら考えようと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

<飯泉知事>

ありがとうございます。やはりキャリア教育の大切さっていうのは、やっぱり適性なんですよ。自分がどこに向いてるのかっていうのも、昔は小学校、中学校であらゆるものを、技術だろうが、美術だろうが、音楽だろうがみんなやったんですけどね。今は、これらの教科っていうのはあまりやる必要がないみたいな感じですが、かといってじゃあ勉強できるかっていったら昔と比べて、本

当にレベルが日本は落ちちゃったんですよね。だったら原点に戻って、田村委員さんがおっしゃっていただいた、何に向いてるかっていうのを、あらゆるものの体験を小学校、中学校のうちにとすると、これが重要なのではないかなと。本当にありがとうございます。またアグリビジネススクールは実はこれ大学院機能ということで作らせていただいて、海外にも行くことができますので、是非お待ちしております。それでは、次は坂口委員さんお願いいたします。

<坂口委員>

ここまでの和やかなムードを壊すような事を言いますので、根底には愛が流れているという前提でお聞きください。非常に厳しい事を言うと思います。

教育委員会と農林水産総合技術支援センターから発表がありましたけど、これが教育委員会であれば専門分野におけるキャリア教育という題材であったり、農林水産総合技術支援センターも徳島県の農林水産業の現在と未来という題材で、それが議題であれば、このプレゼンはそれなりに評価できるものと思いますけど、今回、総合教育会議の場でしかもキャリア教育全体を考えるという中での話であって、この2つのプレゼンは非常に厳しい言い方をすれば、内向きで自己満足の極み、正直言って、学芸会の発表会みたいなものですよ。

前回から気になって仕方なかったが、総合教育会議は、本来、例えば、県外に向けて徳島県をPRするためのパフォーマンスする場であったりするのであれば、僕はこういうものでもいいと思うんです。だけど、総合教育会議でパフォーマンスをしたってしょうがないでしょと。総合教育会議は、今、教育が抱えている課題に真っ正面からぶち当たって、それに対して真剣に討論する場でしょう。はっきり申し上げて、今日取り上げられている部分は、申し訳ないけど、キャリア教育の中では、最も簡単で取り組み易くて、対外的にアピールするのであれば取り上げるべき題材だとは思いますが、県の未来の教育を考える上で取り上げるのであれば、これは失敗だと思いますよ。だってこれは全体から見れば極少数のものを対象にした、しかも、ある程度目標が定まっている専門分野における取り組みの話なんですよね。実は、ここには問題がないというか、問題は多少は当然あるでしょうけども、これは一つの成果発表であって、今後何かを築き上げていく、変えていくことに全くつながらないんですよ。

では、どこに焦点絞らないといけないかという点、今一番キャリア教育をなぜしないといけないかという点に立ち戻って考えたら、それは就職して3年以内に離職する率が異様に高いという数値を出して、今、こんなやばい状況があります、実際専門科行って、キャリア教育を受けて高校卒業して、目的を持って就職したはずなのに、3年以内に離職する子が何割かいる。ここからスタートすべき話じゃないんですか。要はこの結果から課題を成立して、これに向かって今のキャリア教育のシステムをどう変えていくのか、もっと議論しないと総合教育会議の意義が全くない。

では、どうして離職率が異様な高さを示しているのかっていったら、それはそもそもキャリア教育の一見、机上ではすばらしく見えるようなキャリア教育のシステムが全く機能していないか、あるいは、仮に機能していたとしても現実と理想の間にギャップが生じている。要は、キャリア教育のシステムの中で見せてきた理想の社会と現実との間に激しいギャップがあるか、どちらかなんじゃないでしょうか。

結局、どこに取り組まないといけないかと言えば、僕は正に先ほど知事がおっしゃったとおりでと思います。無目的、何になりたいのか、何を勉強したいのか、どうして勉強しないといけないのか、そんなことすらわからない子がたくさんいると思うし、もっと言うなら家庭環境の問題であっ

たり、貧困の問題であったり、そういったところから夢をもつとか、将来自分が何になりたいかなんて考えることすらできない環境におかれた子供たちとか、いっぱいいるわけですよ。どうして、キャリア教育の中でこういう問題につっこんでいかないのか、真っ正面からこういうことにつっこんでいかないと何も変わらない、あるいは、そういう問題が仮になかったとしても、この層が一番多いと思いますけども、要は家庭環境にそれほど大きな問題がない、貧困も、ある程度生活もできている、だけど自分が将来何になりたくて、どういう勉強をしたらいいかわからないという、目的、夢が持てない子たち、こういう子たちにはどこかの時点で厳しさを教えないといけないわけですよ。社会は厳しいところだと。今のこのキャリア教育のシステムでいくと、恐らくフォーラムの中で柿内会長が厳しいこと言ってくれていると思います。ただそれ以外の部分でそういう厳しさっていうところと、でも働くってそれ以上にやりがいがあって尊いことで、それがないと人間生きていけないんだということを教えられるような、もっと骨太な、真正面から問題にぶち当たってそれを解決するような骨太な政策を生みだしていくような、政策をつなげていくようなそんな話が必要なんじゃないかなと思います。

極端な話、マーケティング、広報、PR、あるいは20代後半までであれば、専門技術にしても、就職後であっても取得するのは遅くないと思うんですよ。だけど、私の経験からすると、無目的なまま社会に入ってきた子に、目的を持たせるところから教育することは非常に難しい。

技術をつけさせることはできるけども、その根幹の部分、働くってどういうことか教えるのは非常に難しい、時間がかかるという認識があります。なのでそういうところ、普通科におけるキャリア教育、先ほど言葉は出てきましたけど、それに対する対応とか出てきていない。そういったところに取り組んでいただきたい。

最後にまとめ的なところで、総合教育会議の在り方にしてももっと課題に真っ正面からぶち当たって欲しいというのと、センターの部分はこれ資料として配れば良いと思いますよ、で、なるほどなどと思わせるところとか、こんなこともやっているというところは、事前に配っていただければ家でみてきますよ。ここでは本当に真剣な討論の場にしないと時間ももったいなくて仕方ないと思います。それで、じゃあそれが総合教育会議に出て、現実の政策に打ち出されていくのか、出口の部分も含めて、もう少し総合教育会議の在り方自体も考えた方がいいかなと思います。以上です。

<飯泉知事>

ありがとうございました。坂口委員から、どうしてキャリア教育なのかという原点を今、繰り返しておっしゃっていただいて、まさにそのとおりなんです。今、現象として3年以内の離職率の高さ、もっと言うとその前提としてニートですね。この社会的な現象、これもやはり教育に原因があると、社会全体としてはそう思われている。ただ学校教育だけじゃなくて、家庭教育・学校教育・地域教育ですね。この3つが本当に弱くなった。もっと言うと、その地域と家庭教育が劣化したのがゆえに、あるいは無関心になっちゃったがゆえに、学校教育に全部しわ寄せになってると。で、学校現場が大変な状況になって、本来の教育からほど遠い状況になってるっていうのが、今の現状と言われているんですね。そして今クローズアップされた、いわゆる2つめの子どもの貧困ですね。昔はほとんどこういうことは言われていなかった。一億総中流社会なんて言われて。この子どもの貧困問題、これも正面から我々がまさに取り組まなければいけない。そして何よりも大変なのが、この無目的の子ども。逆に言うとこれが教育現場から作られてるっていうものを、やはりもう少し教育委員会全体としても考えないといけないだろうと。貴重なご指摘なんです。キャリア教育で

一番のところはここなんです。というのは社会的な現象として、さきほども申し上げました様に、普通科の高校に行った、そして普通の大学に行った、そしたら就職できないっていうんですね。そこで、坂口委員が言われた厳しい現実を見ちゃうんですよね。就活をしてえらい目に合う。そこでガツーンとなって、もうやめたってなっちゃうんですよね。また、さきほど辻委員からのキャリア教育どのくらいの子にやってるんですかって問いにも、パッと数字が出なかった。学校も6校でって話、まさに坂口委員が指摘したとおりの数字が出てるんです。だからこれは本当は、普通科高校にこそやらなきゃいけない話。いきなり高校じゃ難しいから中学校あるいは小学校で、全体にやると。そこを私はさきほどから優しく言ってるんですけどね、坂口委員はそれを逆に割とこうエッジを利かせて言っていたわけ、決して別に非難したわけでも何でもなくて、まさに今の社会的な現象をどうやってクリアするのか。学校教育はもとより、やはり地域、そして家庭、こうしたものを巻き込む中で、もちろん学校教育現場でこれ全部やれって言ってもなかなか難しい。こうした点を地域全体で、さきほど三牧委員から全体の成果、インターンシップのメリット、最終的には徳島県全体のメリット最大化にはどうしたらいいのかと。これは今、坂口委員が言われたことをどうクリアしていくのか。それを教育として具体的にどうしていくのか。システムでどうするのか。まさにそうしたものを事細かに全部言っていたということですので。これを逆に言うと政策創造の方にもね、これからやはりそうした社会的な課題を教育の場でどう解決をしていくのか。そうした観点から問題提起をして、委員の皆さん方に対して、いろんなご意見をいただこうという場にしていかなければ、何のための総合教育会議か分からないと。まさにその原点にね、ガツンとおっしゃっていただきましたので、こうした会議をどうしていくのかといった点をね、また是非、対応していただきたいと思います。ありがとうございました。それでは次、松重委員さんよろしく願いいたします。

<松重委員>

非常にエッジの効いた話で後を継ぐのが難しいんですけど、私も賛成なんです。一つは総合教育会議の議論の在り方、体系の在り方について、何をやるべきか、キャリア教育についても一度議論した方がよいと思う。昨年度は総合教育会議を6回して、徳島教育大綱を策定した、その検証ではないですけども、中身を、もう少し実体化するということだと思っんです。今日はキャリア教育の実際を見て、より具体的事項を議論するということだと思います。

今日はいろいろお話を伺いました、小学校でやっていますよ、中学校でやっている、高大連携でやっているということで、教育委員会としては、キャリア教育の一種の体系化ではないですけども、一つの大きな道筋を、テキスト化とはいいませんけども、そういったものも検討してはどうかと思います。

キャリア教育は取り組まれてきているので、それぞれの場で工夫されてきています、ただ大学でもやっているんです。だけどそれを積み重ねて将来の生涯教育に繋げるという視点が実はあまり体系化されていないというのが現状だと思います。いろんなところでいろんな工夫をされていると、それをずっと積み上げていくと。それとさきほど三牧委員が言われたように「キャリアノート」も一つの大きな要素かなと思いました。恐らくキャリア教育は文部科学省でもやっていますし、これの地方版、徳島版を作ることが一つあるかなと。キャリア教育を、小学校、中学校、高校、それぞれのレベルで、それを徳島を範に独自性を出してやる。今日は農業関係なんですけども、今年は徳島大学に1名入った、5名入ったとその数ぐらいじゃとてもじゃないわけですよ。農業もある

し、例えば自然エネルギーの関係もあるし、キャリアとしていろんな要素があると思うんですね。そういった形で今回は農業版といった形なんですけども、他のところも含めてそういった体系化、システム化を教育委員会、教育の場としてはやれるのではないかなと思います。実際、やってみてから、いろいろ例えば実習であるとか、アイデア検討、グループ活動、そして教育のやり方そのものを今までのものとかかなり変えないといけない。先生が教壇に立ってから教えるんじゃないで、先生自身も学習が必要なんですね。だからこれに沿ったFD（教員が授業を改善・向上させるための組織的取組）これをどうするか。それから実際に六次産業化といっても、教育委員会の方もそうなんですけども先生方もまさに将来の現場を知らないわけなんですよ。アイデアなんてこれやったらいい、だけど損失出したときどう保障するのかとかいろいろある。そういったものを作る時に教育委員会のメンバーだけでなく、いろんな方に入っていただいて現実に近いものにしていく、だから厳しいところありますよね、起業でもベンチャーの話があります。成功した人の話は華々しいんですけど、本当に聞きたいのは失敗した人の後の人生を伺いたい。スポーツでもそうですね、スター選手はいますけど、そこにいかない99.9%の人は人生をどう全うしているのか。それはさきほどの3年後の離職率3割、これは大学卒、高校卒は4割、中学卒は5割です。それでも生きていくために、自立するためにどうすればよいか。だから今学力、体力も要りますね、徳島では技術力もちゃんとした形で出せば、外に向けてもできる。ただ、やることに対しては、いろいろなチェックアンドレビューも必要だし、PDCAも回していかなければいけない。こうしたことを、それぞれ社会情勢も含めてやっていく、そういった議論をするのが総合教育会議の一つの役割かなと思います。教育についてはそうです。

もう1点の研究の部分です。今日見せていただいて、施設的には随分あるかなと思いますが、私としてはまだまだ。つまり、徳島からいろいろなものをやるのは、そのオリジナリティをするような研究も必要だし、マーケティングもするには、プロデュースも必要なんですね。実際の研究開発もそうです。是非、徳大との連携の方もありますのでそのあたり。県の方もですね、これ、やるなら科学技術、一番最初に知事が言われたんですけど、やはりある程度人材等、やる気のある人ですよ、それとお金も必要。それは全部県の予算でなくても、国の予算とか上手く活用する。大学校だけでなく、商工労働観光部、そういったところと連携することが必要だと思います。物を作って売ると言うのは単に教育の問題ではない、だから産業、県庁の中もそうなんですけど、そういう視点での取組みというのにも必要かなと思います。県教育委員会レベルとしての話は、徳島としての特徴ある産業をどう作っていくか、どうプロデュースしていくか、今、この機会に藍の応用、こういったものをもう少しいろいろな視点でやれば、徳島から産業の発信という形ができる。それが一つの勇気づけになってキャリア教育のビジネスモデルになりますので、実現するには、単にアイデアだけでなく、最後まで責任持ってやるような人と体制が必要だと思います、少しコメントさせていただきました。

<飯泉知事>

ありがとうございます。大きく2点いただきまして、さきほどの三牧委員も具体的にお話をいただいた様に、やはり大綱を作った、あるいはそれぞれの部門計画があるのをそれを実際にどう移して成果を出すか。ただ当然それを教育としても評価をする、どんな形で評価をするのか。こうしたシステムを、そしてできればキャリアボードなどの徳島版ですね。徳島ならではのやり方、システム化、こうしたものを。また研究ですね。これも最終的にはそうしたものから具体的に業が生ま

れてくるわけですので、そしてまたその業がベンチャーとして立ち上がったんだったら、当然いろいろな、ここは商工労働観光部の部分にもなってくるんですが、国の、あるいは県としての様々な資金、こうしたものを活用していただこうと。起業するというのであれば当然そこへの支援、あるいは場所の支援、こうしたものも入りますので、そうしたものをやはり体系化をしていくといった点が大変重要ということです。そして、やっぱり一番重要なのは、藍もそうですし、あるいはLED、そうしたテーマ、これもやはりいろんなところに与えていくと。ただ単に自分たちで好きなことやってくっていうんじゃないで、そうしたことによってある一定の方向、徳島らしさっていうものがね。そのためにはどういう人材がいるのか。こうした形でフィードバックしていくと。こういった形がやっぱり重要な点だと、今いただきましたので、これは農林水産部だけでなく県全体としてどう対応をしていくのか。これをつなげていくってということですね。それでは、全体も含めて、美馬教育長さんよろしくお願いします。

<美馬教育長>

今日は様々なご意見をいただきまして勉強になりました。ご示唆に富んだご意見をいただきましてありがとうございます。坂口委員の辛口のご指摘もなるほどと思うところが非常に多くありました。また、これからの総合教育会議の持ち方についても政策創造部と一緒に考えていきながら、課題、問題を焦点化して、それを討論していただくという形をしっかりと行って行きたいと思えます。

私からは、まずはさきほどのキャリア教育の中で、専門高校に焦点を当てた形で進めているというのはまさに知事が最初におっしゃいました、本当は普通科の問題なんですよね。大学へ進んで、それでも仕事がないというところから、目的意識をはっきり持たそう、自分の適性を見つけさそうというのは早いほどよい、早くから始めなければいけない。そこで避けて通れないのは、本県でも、どうしても大学進学ということで、輪切りで高校へ進学してくる状況が続いている。そういったところをしっかりと変えていきたい。まず、専門高校を活性化していく、それが一番いい形だろうと信じてやっている。専門高校の子供たちは目的を持ちやすいですし、適性も見やすい。そこでしっかりと生き生きとしてやっているということを皆さんに広げていく。ただ、そこがまだまだ足りないなと私も感じています。農大さんからお話がありましたけども、小・中学生にもっともっとPRしていく、体験なんかもしていただきたい。高校からも中学校の出前授業なんかやっているんですけど、そういうやり方がもっともっと専門高校に目的を持った子にどんどん入ってもらえるようなこともしていかなければいけないと思っています。

もう一つ離職率の話が出ましたけども、私も昨年、全国工業高等学校長会全国大会でも離職率の話が出まして、工業高校を出ている子は離職率が非常に低い、かなり高率で卒業から3年、5年働いているデータがございました。やはりそこにはいろんな要因がある。こういうこと言うと何なんですけど、工業の世界は昔ながらのところがあって結構厳しい、これは、機械を使うので危ない、そういう中で日々やってきている。もう一つ、資格を取ってきている、技術力といった点がある。そういった点で離職率が低い。そういった点も考えますと、専門学校で技術を手にした者は、普通科から大学に進学した子供よりもしっかりとした進路を持つてるのではないかなと考えています。ただ今度は普通科の子供にも広げていかなければいけないと。そういったところで、小・中学生、特に中学生に体験できるようなことがあれば。農業大学校の方から、中学生を集めてこんなことやったらと意見をいただければと思います。

徳島大学に生物資源産業学部ができて非常に有り難いのは、高校の普通科の子供は大学に行って

いろいろ学ぶんですが、農業系は学ぶところがなかった。農業大学校はあったんですけど、どうしても大学は。そういうところで、今日施設を見せていただいて、中学生、高校生が見てもわくわくするようなところがたくさんあると。そういうところに呼んでいただければありがたいなと思います。

もう1点ですが、本県、平成26年3月に、「キャリア教育推進指針」を力入れて作って出しています。その中に課長の方からも話がありました「かかわる力」「みつめる力」「すすむ力」「えがく力」この「かかわる力」は人間関係形成力ですね。結構、離職する子の多くは、上司と上手くいかない、同僚と上手くいかないといった、人間関係形成力、コミュニケーション力ができていないというのがよく聞く話。こういう力は高校で形成するものではなく、やはり小中高と養っていくもの。

「みつめる力」は自己理解、自分の適性、良さをしっかりと見つめるいう力。「すすむ力」は課題対応力、「えがく力」はキャリアプランニング能力、ここらへんをしっかりと小・中・高と発達段階に応じた指針を示している。

ただ、さきほど松重委員からもありました、これが十分に活用できているのだろうか。我々はいいものを作ったつもりでも、現場では全然読んでいないことがあるんじゃないか。ここらへんを今一度、しっかりとエッセンスを、もうちょっと分かりやすく、またなんとか活用できるように持っていく必要があるのかなと考えます。

それと、さきほども申しましたように、最後になりましたが、職業選択、研究対象の面白さ、自分の適性を小・中学生にわかってもらうような工夫が特に大事ななど。専門高校はやってきていますけども、普通科はこれからなので。活動をしっかりと力入れてやっていきたいと思います。ありがとうございました。

<飯泉知事>

ありがとうございました。総括を教育長さんにしていただきましたが、おっしゃるとおりですね、大きく2点。まず子どもさんに対しては、やはり早い段階で自分の適性とか、いろんなものを見せてあげるということが重要じゃないかな。また、学校の先生方、特に現場の先生、今言われたようにせっかくキャリアプランができていないのに、みんな知らないとか。もっと言うと教育大綱を知らないとかね。逆に言うと、そんな先生方は指導的な立場になる意味がない。教頭先生あるいは校長先生にね。だからそうした点を教育委員会の中の先生のキャリアシステム、今、新しい先生を採用する際にはそうしたところを徹底的に今、問うているんだよってという話はよくお聞きするんですけどね。若い人たちだけでなく、その人たちを指導する、あるいはその人たちが目標にする、そうした先生方に対して、そこを理解していただくといったことが重要なんじゃないだろうか。そうした点を今、教育長さんのお話でも思ったところです。是非、今日いただいた点について、これは政策創造部の方でね、しっかりと。この総合教育会議というのはどういう場なのかという、坂口委員からご指摘をいただいた点。これからそうした方向で行きますので。委員の皆様方、本当に積極的にお話をいただきました。ありがとうございました。今日のこのキャリア教育というのは、まさに全般的なことにつながりますので、これからしっかりとこうした方向で進めていければと思います。本日はどうもありがとうございました。

以 上